

# 「ミュアヘッド・フィールズの過去、現在、未来（その10）」

2023年10月

ブリック&ウッドクラブ理事会

(文責：中島健一郎)

## 1. 直接民主主義へのチャレンジ

メディアで採り上げられた例を引き続き紹介したい。

2017年元日から朝日新聞千葉県版は「20XX年の未来予想図」シリーズを新年企画として始めた。年頭を飾る企画は新聞各社が読者に「今年はこの年ですよ。」とアピールする大事なもので、内容は支局内で大議論の末決められる。そのシリーズの第1回目にブリック&ウッドクラブ(BWC)と一体化した土太郎村(現ミュアヘッド・フィールズ コミュニティ=MF C)が千葉県版のほとんどを使って採り上げられ、1月1日の紙面を飾ったのだ。



BWCと土太郎村を合わせて、後に地域全体をミュアヘッド・フィールズという冠名で呼ぶことが決まり、土太郎村は通称となった。同紙の石平道典記者が何度も取材に来て書いた紙面には「20XX年“土太郎村”独立」「自給自足のコミュニティ」、「自然と調和“本当の豊かさ”提案」の見出しが躍る。石平記者は「緑深い自然の中、敷地面積約10万坪の広

大な“村”の建設工事が急ピッチで進んでいた。土太郎とはこの地の字名だ。」「入口ゲートから入ると、れんがを敷き詰めた坂道が続き、ロジ風の木造の家が並ぶ。その先の高台からは太陽光パネルや人造湖である土太郎湖、建設中の住宅などが一望でき、手作りの村が姿を見せていた。」と書き進む。

村作りの推進者である坂征郎さんはインタビューに対して「土と水と緑に囲まれたコミュニティで本当に豊かな未来を提案したい。」と夢の村づくりを熱っぽく語り「そんな最中、2011年に東日本大震災が発生。そして東京電力福島第一原発事故。超高齢化と人口減少に向かう中、もう国や行政などに頼る未来では、いけないのではないかと強く思った。」という。村長の中島健一郎も石平記者の取材に対して、土太郎共和国独立宣言構想を明かしている。中島は土太郎村の初代の理事長になったが「理事長ではなく、村長と呼んでほしい。」と村民にお願いし、次の理事長に引き継ぐ時に村の総会で「今後も中島さんは村長と呼びましょう。」と決まったので、「村長」と呼ばれることが多い。土太郎共和国は村民の話し合いでルールや運営を決める直接民主主義を採用し、いずれ独自通貨の発行も考えるとしている。そこには自主・自治・自立が大切という考えが根底にある。いつか独立宣言を起草したいとし、「自給自足コミュニティを実現し、村民が生き生きとしたライフスタイルを送る。世界中から見学者が訪れるような、未来の村のモデルになれば。」と語った。

さて、このように土太郎村が世間から注目され始めたのは、開発が着手された2011年の4年後には10万坪の敷地の内1期工事地区約9千坪の23区画が売れて家が立ち並び、2期工事地区の造成が始まったので、全体計画が本物と受け止められたからだった。

## 2. ゴルファー村

ゴルフダイジェスト誌2015年7月号の「その話、イチ乗った！キムラ見聞録」で“アマチュアらしさは超プロ級”といわれる木村和久氏が土太郎村を見学し「エコでロハスな“ワリカン制”のゴルファー村」とレポートしている。

木村氏の原稿のさわり（核心部分）を紹介する。「実際に住宅地を見ながらお話を聞いたけれど、そのプロジェクトの壮大さにただ唖然とするばかり。33万平方メートルの敷地は“ゲートビレッジ”といって、ロックされたゲートでしっかりセキュリティが守られている。黒を基調としたシックな住宅は、すでに住んでいる人もおり、中を見せてもらう。外見はこぢんまりしており、土地込みで約2000万円は高いかなと思ったけど室内を見てびっくりし、充分納得だ。半地下の部屋とロフトがあり、実質3階建てになっている。これは広い。設計は自由だから、ハンモックを吊るしたりサンルームを作ったり、ワンちゃん用に床をテラコッタにしたり、と皆さんいろいろ工夫して楽しんでいる。」

開発を仕切っている坂さんが「単にゴルフ場に隣接する住宅地を造ってもつまらないでしょ。今の日本の抱えている問題をすべて解決するために、何をすべきか模索し、ここでひとつの答えを出したいんです。」と語り、木村氏にソーラー発電や敷地で切った杉やヒノキ

を自ら買い取った製材所で製材して地産地消の建材として利用していること、近くの高滝湖畔の田んぼや農地を購入しての穀物や野菜の自給自足計画を説明している。

木村氏は製材所まで買ったことに「すげえ、スケールでかすぎだ。さらに近くの田んぼも見せてもらったら、この農地も買ったそうだ。坂さんの作業小屋を見たが、トラクターや耕運機、コンバインなど、すべて揃っているのに驚く。」と書いている。

この記事で坂さんが語った売店や食事スペースは現在、さらに構想が発展した。BWCの入り口を出た県道の反対側に古民家を移築してのレストランがすでにランドマークとして完成間近となり、別棟には発酵料理専門店や甘味処、その周辺に産直広場、ゴルフ練習場などが次々と建築されようとしている。この古民家エリアは、BWCにプレーに来たゴルファー、MFCの住民、さらに地元の方々、首都圏から房総半島に遊びに来た人が利用出来る地区になるが、その詳しい内容は「ミューヘッド・フィールドの過去・現在・未来(その11)」で報告する。

### 3. 日米友好のハナミズキ

GOLF TODAY 2016年4月号に「ゴルファーの理想郷」としてMFCが見開き2ページで敷地の地図をはじめカラフルな写真付きで紹介された。理解するためのキーワードとして

- ゲートッドコミュニティ（森の中で安全・安心）
- Cart Transport(マイカートによるゴルフプレー・移動の生活)
- Farm & Food(Klein Garten/食糧自給自足)
- Eco Community (4300kwのソーラー発電・排水処理・伐採木利用)
- LAKE 土太郎 (ボート・小型ヨット係留・釣り・水辺住宅・深山幽谷)
- Future Center (日本の未来を担う青年と事業・マスコミ・芸術・政治等で活躍した人との出会いの場。音楽演奏、本読みクラブなどのセンター)
- Town meeting (親方日の丸ではなく民が中心の街づくり)
- Good access to Tokyo (通勤可能、木更津金田バスターミナルからは15分おきに東京駅へ高速バス運行、マイカーでも東京駅まで60分)
- 選べる生活スタイル (四季の変化を味わえて、スポーツに、農業に。乗馬クラブも隣接している)

——などが列記されている。

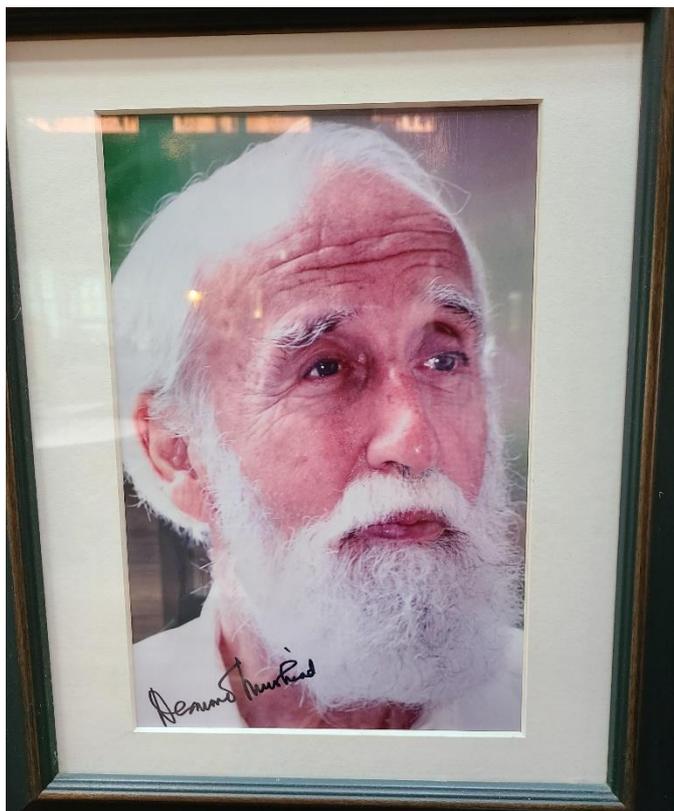
また駐日アメリカ大使館が土太郎村の精神に賛同して寄贈してくれたハナミズキの植樹式の写真が掲載されている。ケネディ大使の代理で参加したティモシー・ジョンソン書記官・栗山昌子元米国大使夫人・BWCの石井博子理事長が土太郎村の坂道を登りきったロータリーの中に丁寧にハナミズキを植えた。このハナミズキは日米友好百年(2015年)記念の行事のひとつとして震災復興地などを含め3000本が米国から日本に贈られ、その一部を

寄贈いただいたものだった。

毎日新聞社のワシントン支局長だった中島が、アメリカ大使館にMFCの民主的な管理組合組織や自然エネルギーの活用、ファームでの食糧生産の開発精神を説明したところ栗山夫人の応援もあり、40本を寄贈してくれた。

「Friendship blossom 米国から日本の皆さまへの贈り物」のプレートは岩にはめ込まれハナミズキの根元に置かれている。

2016年8月27日に土太郎村（株式会社ACORNが開発し、現在は管理組合法人に移管）とBWC（株式会社高滝リンクス経営）のエリア全体を、コースを設計したデズモンド・ミュアヘッドの名前にちなんで「ミュアヘッド・フィールズ（MF）」と命名したことは特筆すべき



ことだ。発表式典の前にカート数十台を連ねてBWCから2番ホールのティーイングエリア脇のカート道を通って住宅地域の視察会が行われた。BWCのメンバーやその知人、入居希望者や報道関係者がハナミズキロータリーに集合した光景は壮観だった。坂さんが「すでに37棟が建設されており、年内に40棟を超える予定である。住宅地内にはパー3のホールが2つ造られており、住民は好きに利用できる」などを説明した。何軒もの住民が自宅を開放、参加者が自由に覗くことができたのが好評だった。

#### 4. ミュアヘッド・フィールズ

午後4時半からはBWCのレストラン棟で木内充高滝リンクス倶楽部社長の挨拶を皮切りにバンドも入ってパーティーが開かれたが、これ以降、MFCの住宅を購入する方々が順調に増え始めたのだった。月刊ゴルフマネジメントは2016年11月号の17ページで、ゴルフ場と居住区の総称がミュアヘッド・フィールズと命名され、発表式典が行われたことを伝え、さらに42ページから45ページまでその詳細をレポートしている。

「究極のプライベート性」として年会費の制度が改定され、従来のA～C3コースに加えSコース（年会費を払えば年間何回でもプレーが可能）が新設されたことについて報告されている。BWCではコースの違いによって年会費・プレー料金・ミニマムユース額が変わる。年会費とミニマム代が高くなるほどプレー料金は安くなるが、Sコースは年会費36万

円・ミニマムユース 80 万円 (いずれも個人会員の場合) と高額だが、プレー料金は無料 (ゴルフ場利用税は負担) である。

「ミニマムユースは会員がクラブを支えるという原則的な考えから、年会費のほかに施設での“年間最低利用金額”を定めた制度です。自分のプレー代や飲食代はもとより、同伴ゲストのプレー代なども合算して計算し、年間最低金額に達しなかったときは不足分をあとで支払うというものです。アメリカではよくあるシステムですね。」というのが坂さんの説明だが、Sコースでは本人のプレー代が加算されないから同伴ゲストの利用料金や食事でミニマムユースを達成しなければならない。

中島はSコースを選択したが、克蘭フレンド (メンバーが知人を登録すると、その知人は平日の予約を自分で出来て、しかもプレー料金も安いなど特典がある) を増やすなどミニマムユース達成に努力している。MFCに住んでいるから好きな時にハーフゴルフや夏には薄暮プレーをする。70 歳以上はゴルフ場利用税も無いし、プレーには1円もかからない。年会費やミニマムユースは高いが、中島は回りたい放題の贅沢さを享受している。

ゴルフマネージメント誌はMFCを巨大“居住クラブ”と認定して、詳しい内容を書いている。長くなるがちゃんとした内容なので紹介しよう。

「さてこの宅地エリア、土地を購入したからといって、自分の好き勝手に家は建てられない。宅地はヒルトップ、ヒルサイドなどのゾーンに分かれ、ゾーンごとに家の壁や屋根の色が指定されるなどの制限があり、それを総合的に管理するのが住民で作る管理組合である。もちろん土地は個人の所有だが、道路から2m以内は芝地で塀を設置したり、植樹はできない。ただ、芝刈りなどは組合が行う。また道路や水道などの維持費用も組合が管理するため、マンションと同様管理費を拠出して全員で負担する。

いわば居住エリア全体が一つの“クラブ”なのだ。ゴルフクラブも本来、ゴルフ好きが集まって一緒にゴルフを楽しむ組織であり、規律を守るために規約によって行動などが制約される。同様に居住エリアも、ゴルフ場のそばに起居してゴルフを中心に生活したいという人たちの集合体だから、当然そうした環境を維持するためにも規約は必要。それを納得して入居する、つまりコンセンサスを得た人だけの集まりでなければならない。命名式典では居住者 (会員) が招待者を案内していたが、それがここの住民の実相なのだ。

そして管理組合にも環境、価値、財務、規定の4委員会が設置されており、これらも住民のボランティアで運営される。またエリア内の道路は全て私道で、現在は経営会社 ACORN の所有だが、将来的には組合が7~8割を所有することになるようだ。現在エリアはゲートによって仕切られており、住民は専用のカードによって出入りしているが、入居者が増えてくれば組合が様々な管理を行うスタッフを雇用する予定で、このゲートも夜間を除き守衛によって管理されることになるという。」

以上、記載された内容はその後の状況で変更や発展的改定が行われているが、概ねMFCがどのような考えで運営されて来たか理解するのに役立つものとなっている。

## 5. 終活

週刊パーゴルフ 2018 年 43 号はゴルフジャーナリストであると同時に終活カウンセラー協会の上級インストラクターの資格を持つ小川朗さんの「ゴルファーの終活」という珍しい独自取材を 4 ページにわたり掲載している。

小川さんは「終活というと死をイメージし、縁起でもない話、となりがちだが、実際は違う。人生の終着点を思い、一旦人生の棚卸しをして、そこからよりよい人生を送ろうという前向きな活動なのだ。」という。記事では会員権の相続問題なども解説しているが、「ゴルフは終活にぴったりのスポーツ」と太鼓判を押している。そして MF での生活が終活という面でも紹介に値すると判断されたようで、かなり踏み込んで取材している。その内容はこれまで多くのメディアに取り上げられたことがほとんどだが、健康寿命を伸ばすこと、100 歳まで元気で過ごせるコミュニティ作りが MF のテーマの一つであることを指摘している。つまり「死ぬ間際までゴルフを楽しみ、わずかな介護年数で天寿を全うする。ここでは人生 100 年時代に理想となる PPK (ピンピンコロリ) が現実味を帯びる。」と MF を評価しているのだ。

現在、79 歳の中島は小中高の同窓会などに行くと「どうしてそんなに元気そうなの？」と聞かれることが多い。答えは「ゴルフ場の隣に住んで気軽にゴルフしているからかな。」だ。現役時代はゴルフに誘われると、早朝に起き、車を 1 時間くらい走らせて集合時間にクラブハウスに駆け込んでいた。プレー後は交通渋滞の中、夜 9 時ころに帰宅したものだが、もうそんな 1 日つぶしての強行ゴルフは無理だ。でも MF C からなら BWC までは車で 5 分。プレーしてゆっくり風呂に入り、ラウンジでおしゃべりしてもハーフなら 4~5 時間。ラウンドでも 7~8 時間で済む。

記事の中の武藤頼胡終活カウンセラー協会代表理事の発言を二つ紹介する。

「先日、致死率 85%といわれる大動脈解離から生還した患者さんが、お医者さまから“走ったりしなければゴルフならやってもいいよ”と勧められたそうです。激しいスポーツはさすがに無理でも、ゴルフなら OK。無理なくできて、長く続けられるスポーツこそが、終活にはぴったりです。」「ゴルフは世代を超えたコミュニケーションツールになりえます。シニア層と若い人たちが、一緒に長時間過ごせる。自然な形で、年長者が、自分の経験を若い人に伝えることができる。これこそが、今の時代に必要なことに思えます。」

蛇足だが、中島が元気な理由には MF C に住む女性陣とゴルフを気軽に一緒できることもあるかもしれない！？

## 6. MF C の住宅

続々と家が建ち、MF C の景色は、それなりの雰囲気醸し出して来たことにも触れた。電気ケーブル、水道管、光ケーブルなどインフラが地下埋設のため、電信柱がないのが

清々しい印象を訪問客に与えている。そして「住宅特集」という建築専門誌に特集される家もいくつも建った。2019年6月号の「住宅特集」にはM邸について8ページを費やし、設計図やカラー写真で掲載された。

遊空間設計室の高野保光さんが設計について語っている。

「ゴルフコースに隣接した住宅コミュニティに建つ週末住居である。敷地は丘の中腹にあり、人口湖を臨む眺望が南斜面の先に広がり、東西は隣家が並ぶ。

家のシルエットは森や林が重なる周辺の稜線と呼応するように、斜面に沿って切り妻屋根が4つ重なる構成とした。その屋根の下で、内と外に繋がる多様な居場所を用意した。将来的には終の住処となることが前提であるため、日常に多くの気づきをもたらすように、個々の居場所の前景に向けて光と景色を絞った大小の開口部を設け、室内外を移動し視点を変えながら暮らしの風景を空間化することを試みた。

傾斜する敷地に対して、どこにどのような暮らしの場を用意するか、敷地内を歩き回り、立ち止まっては遠くを眺め、居心地のよい場所はどこかと探し回った。東西に隣接する住まいの床が、道路レベルから水平に南に伸びているのに対し、この住まいは傾斜に沿って這うようにスキップ、平屋を雁行するように伸ばして隣家の視線を避けた。寝室棟のみ道路側に2階建てとしている。

外壁はレッドシダーの板に1本溝を入れ見付70mm幅の板張りにした。内外の中間領域にある広いデッキスペースでの暮らしを受ける壁としても、遠い距離から近い距離まで光によって表情が刻々と変わる。内壁は数種類の土を調合した左官壁とし、石油製品を極力使わない仕様として、この地の環境に馴染みシンプルで着心地のよい光と空気の質を目指した。

求めたのは特殊解としての別荘ではなく、日常の生活感覚をもちながらも起伏に富んだ森と人口湖もある景観が、四季折々住まいと呼応し多様な顔を見せる、家族の暮らしと一体となるような週末住居である。」

M夫人は著名な和食店をものごよ  
うな料理の上手な方で、何回か中島ら住  
民数人が招かれたが、素敵な室内空間と  
ともに食事にも大感激した。またベラン  
ダでの爽やかな天気の日バーベキュ  
ーは景色も含め忘れられない。

ところで手前味噌になって恐縮だ  
が、中島の家も 2016 年 11 月号の「住宅  
特集」で「土壁のある現代の民家」とし  
て 8 ページにわたり掲載された。日経ア  
ーキテクチャ 2017 年 7 月 27 日号で  
も「“積む”構造で素材をみせる」とい  
うテーマで 6 ページの特別リポートと  
なった。

この中島の土壁の家は一般社団法人  
日本建築事務所協会連合会（大内達史会  
長）から平成 29 年度の小規模建築部門  
で優秀賞の表彰を受けた。また公益社団  
体法人日本建築士会連合会（三井所清典会  
長）からは平成 30 年に特別賞を受賞し  
た。いずれも設計者である薩田建築スタ  
ジオの薩田英男さんが賞をもらったの  
だが、施主である中島はとても嬉しかっ  
た。

「日事連」は日本建築事務所協会連合会の機関誌であるが、2018 年 3 月号で、建築賞受  
賞作品の建築訪問で土壁の家を取り上げた。以下に僕の補足を加えながら要約する。

施主中島は毎日新聞社の常務取締役を 2006 年に辞めて「もう都会のコンクリートの箱に  
は住みたくない。」と東京理科大学の工学部長だった友人真鍋恒博氏に相談した。「工業製品  
は使わずに左官の技や地元の木材を使って地産地消の家を作りたい。誰か紹介してほしい。」  
「心当たりが二人いる。一人は繊細な女性でもう一人は野獣派だ。どちらを選ぶ?」「もち  
ろん野獣派だ。」

この時、選んだ薩田英男さんは、あとでわかるが、人柄はとても温厚な人で、野獣派と  
いうのは左官など日本の伝統技術を大胆に生かす仕事のアバンギャルド性を指していたの  
だ。中島の要望を聞いた薩田さんはフィボナッチ級数に基づく巻貝のような渦巻き型のプ  
ランと敷地の土を利用した土壁の家を提案し、中島は「直観的に面白い。」と決断した。2014  
年暮れに宅地の完了検査が終わり、基礎の上に放射線状に配置された 5 本の土壁づくりが



始まった。

中心の版築壁は厚さ 1 メートル 20 センチで中に暖炉が仕込んである。他の 4 本は厚さ 75 センチの練塀。周辺の土に消石灰 12.5%、セメント 12.5%を混ぜ特別の鉄製のコネ場を作り、パワーショベルで練った。とにかく量が半端でなく多いので、人力や左官のコネ機械では間に合わない。そのコネた土を型枠に 15 センチ入れて半分くらいになるまで叩き絞める。丸竹を縦横に組んで芯とし、麻縄で縛る。これらの作業を関東一円から集まった植木屋・左官がお祭り騒ぎで行った。宿泊は中島が最初に建てた自然エネルギーハウスで雑魚寝。毎晩交代で食事を作り、一升瓶を空にした。食費と日当、遠方から来るガソリン代、高速料金を合算すると 1 千万円を超える出費だったが、中島には忘れられない思い出だ。

巻貝状に向きの異なる土壁の上に木架構を乗せて屋根を形作るという大工仕事は市原市周辺にまだ存在する宮大工がいなければ不可能だったかもしれない。棟梁の佐久間栄一さんは丸太に墨付けが出来、大黒柱のケヤキを 8 面体に正確にカンナをかけることが出来る腕の持ち主だ。「なんでこんなに難しい設計をするんだよ。」「それをこなすのが大工の腕だろう。」佐久間棟梁と薩田さんは時々喧嘩したが、今は互いに尊敬しあう仲だ。

エアコンは取り付けず、夏は風通しで、冬はイタリア製の薪ストーブボイラーからの温水を 2 トンの蓄熱水槽に貯め、家全体を暖房する仕組みを導入した。「土壁が放射状になっているので、窓から見える景色も全て違って見えるんだ。」と語る表情からは、建築主が自ら作り上げた満足感が伝わってきたとレポートはまとめている。

## 7. ミツバチとチャリティー

土壁の家は 2016 年 3 月末に完成したが、様々な集会・イベントの場所にもなっている。「ナレッジサロン」(知り合いの専門家の講演を聞く会)、「健康道場」(東洋医学などを体験する会)を開催したこともある。中島が庭で飼っている西洋ミツバチの巣箱 2 つからは 4 月から 6 月の花の多い時期にたくさんハチミツが 3 回くらい採取できる。MFC の住民約 30 人がミツバチチームを結成しているが、採蜜イベントの時には参加可能な方々が 12 人ほど集まりにぎやかに作業する。巣箱から蜜枠を取り出し、刷毛でミツバチを落とす人、煙をかけてミツバチがお



となしくなるようにする人、遠心分離機のハンドルを回して蜜を枠から落とす人、蜜を濾して混ざりものを除く人、ビンに計量して詰める人。もう慣れたもので指示がなくても作業は進む。鍋に残ったハチミツはパンにつけて食べたり、紅茶にミントを入れて飲んだりする。お子さんや、お孫さんを見学に連れて来られ、自然の恵みを教育される人もいる。年中行事としてすっかり定着した。

特筆したいのはチャリティーバザーだ。中島の両親が遺した食器類を捨てるに忍びなく土壁の家のテーブルに並べ「好きな値段で買ってください。」と呼びかけたら約10万円の売り上げになった。それを半分ずつ近くの母子生活支援施設と知的障がい者の福祉作業所に寄付した。

2年目はMFCの方々に自分の家で使わないものを寄付してもらい、売り上げは約15万円になったので5万円ずつの寄付先に子ども食堂を追加した。3年目はチャリティーバザーの会場をBWCのレストラン棟に移して、運営も賛同する女性陣が加わった。やはり15万円を超える売り上げだった。

4年目の2023年のバザーは女性陣の頑張りで、なんと37万円もの売り上げ。10万円ずつ母子生活支援施設、知的障がい者の福祉作業所、子ども食堂に配って喜ばれた（残り7万円は繰越）。子ども食堂の運営をしている山内恵子さんはバイタリティーの塊のような人。貧困家庭の子どもが7人に1人と言われていたのが、最近の統計では6人に1人に増えたこともあり、フードバンクを開設し、周辺の子どもの食堂30カ所に食材を提供する活動も始めた。MFCには裕福な方が多いが、チャリティー精神が少しずつ高まっている。

## 8. 石井栄一さん

ニュージーランドの新聞 Otago Daily Times の2016年1月9日付けの記事をこの稿の最後に取り上げたい。地域面の26ページに大きく取り上げられているのは、BWC創設のころから応援してくれた株式会社 Too の社長石井栄一さんである。同年4月に石井さんはニュージーランド政府からメリット勲章を授与された。外国人が叙勲されるのは珍しい。授賞理由は「ミルブルックリゾート」を創設しニュージーランドのゴルフと観光に大きく貢献したというものだった。

坂さんはかつて「ミルブルックリゾート」を石井さんの案内で訪問して感激し、まずBWCの指標とし、さらにゴルフ場と一体化した住宅地を夢に描いた。石井さんは自分達で力を合わせてゴルフ場を造るという坂さんの考えに賛同し、幅広い人脈を駆使し、何十人ものメンバーを集めてくれた。「石井さんの紹介は確実だった。しかも見返りは求めない人だった。」と坂さんは石井さんを尊敬している。

大正8年に祖母石井そよさんが渋谷区の青山学院近くに「いづみや画材専門店」を創業したのが石井さんの会社の始まりだ。昭和25年「有限会社いづみや」に改組し、母石井英子（ふさこ）さんが引き継いだ。ふさこさんは「Never give up」精神の女性で、先進的な



# Millbrook founder credits his mother

Scars on his hands are testament to Millbrook founder Eiichi Ishii's strict upbringing. He talks to David Williams.

EIICHI Ishii, it seems, was a naughty little boy.

When he was a lad, the Millbrook founder's late mother, Fusako, had a specific punishment if he broke the rules.

She would put incense and dried grass on his hand and set them alight. The scars are with him today.

"I'll show you this," Mr Ishii says, leaning forward on the sofa at his Millbrook Resort villa.

On both of his hands, in the fleshy part between his thumb and index finger, are small white marks.

"This is a sign of punishment when I did something wrong."

An example was when he was 14 years old, he rode his bike on the main road because it was smoother than the cobbled path. One day, his bike was hit and destroyed by a bus, while he jumped out of the way, escaping injury.

He got home and exclaimed to his mother he was OK. When he told her the full story — that he had defied his mother and ridden on the road — punishment was meted out.

"It's not," he recalls. "She was very strict." (Given his scars, is he a very naughty boy? "I'm not sure that," Ishii chuckles.)

But ultimately it was the support of his mother — forced from his father when he was just 13 years old — that did prove crucial to the Ishii family buying Mill Farm, near Otago, and developing Millbrook.

It was Mr Ishii who decided to set in Millbrook near Otago, and his mother ported the decision.

He had five brothers and other directors on the company's board agreed, so long as it was too far from its core business

(art supplies and later computer software, distribution and support). Her only son wanted to invest in Millbrook and the Ishii family were 100% shareholders.

She told them: "I hope that you other directors would agree to say yes." They did, unwillingly.

Last year, Mr Ishii was made an honorary member of the New Zealand Order of Merit, for his services to New Zealand-Japan relations, golf and tourism.

He also has his mother to thank for exposing him to the English language at a young age.

When he was 11, while his friends were holidaying at beaches and mountains during the summer holidays, she sent him to be a servant for a family at an American military base.

The American mother was a customer at his mother's art supplies business.

It started Ishii's love affair with American culture, which would see him study at Stanford University and Harvard Business School, on top of training at Tokyo's prestigious Keio University.

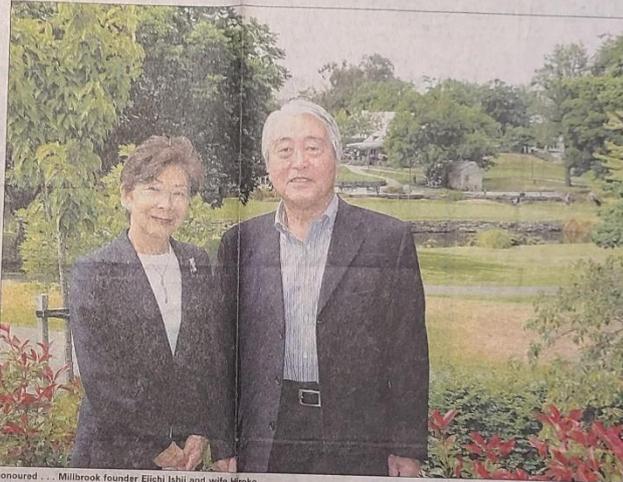
Mr Ishii (She (Fusako) thought that English was going to be a very important language in the future. So she wanted to make sure that I should learn enough English language so that I can travel around the world.)

In her, the beautiful mother of the American military family already had two servants, so she spent much of the summer teaching the youngster English.

This consisted of her telling a story and him repeating it back in his own English words.

During his college studies in America, his mother did not visit. She told her son if she was to fall sick — or even die — he should see out his studies rather than come home.

Mr Ishii: "I started appreciating that very hard



Honoured... Millbrook founder Eiichi Ishii and wife Hiroko.

"They were very interesting English lessons."

The family business started as Izumiya, which grew to become Japan's largest art supplies company. The company rebranded to Too Corporation, with art supplies as one arm when it expanded into computer software for graphic, product

and industrial designers. It also distributes and services computers, products and software for the likes of Apple, Adobe and Canon. About 70% of its sales come from the digital arm. One of its most famous "analogue" exports is Copic markers, sold in more than 50 countries.

Mr Ishii: "Very fortunately, we can sell as many as we are producing. We are trying to double the production."

The company was founded in 1919 and he is the fourth generation. The first two generations were Mr Ishii's grandmother and mother.

Mr Ishii's son Goia, now the

company's president, says annual sales are about NZ\$200 million, or NZ\$250 million.

Other than Mr Ishii's obvious contribution to golf and tourism — personal assistant Teresa Chapman says "Mr Ishii would be one of the best marketers of this country, of this district" — he is also celebrated in the New Year Honours list for bringing Japan and New Zealand closer in business.

Mr Ishii and wife Hiroko often bring leading Japanese business figures to New Zealand. One is staying at Millbrook during our interview — Noriko Nakamura, the head of Poppins Corporation, a nanny service with 2000 employees.

started appreciating that very hard decision-making and toughness of my mother

"The purpose of the NZ Open is not just only golf," Mr Ishii says. "Golf is, of course, the main part. But behind that we are trying to develop economic ties between Japan and NZ — big figures discussing what business we can possibly develop."

You can see the threads of Ishii's family trying together in Mr Ishii's traditional way of thinking and doing business.

He says his mother's support was unwavering, despite Millbrook being "very shaky" financially.

Mr Ishii: "Every year we have to put in some kind of assistance in terms of cashflow. But my mother's theory was never give up — not only just on Millbrook but on any other thing."

"I respect my mother's strong determination — once she decided to do something, she would stay on and never give up. That helped my career as well."

Mossburn Scene.

画材・デザイン用具を輸入するなど業容を広げた。

Otago Daily Times の記事によると、やんちゃな栄一がルール破りなど間違ったことをすると、手の親指と人差し指の近くに藻草を乗せて火をつけて懲らしめたという。Times の記者が見せてもらったら、いまだに小さな白い痕が両手に残っていたらしい。ふさこさんは「将来、英語は大事。」と栄一青年をアメリカの家庭に送り込み、その後、慶応大学の他、スタンフォード大学そしてハーバードのビジネススクールで学ばせた。

1984年にふさこさんは石井さんを社長にするが、日本最大の画材店に成長していた「いづみや」が産業デザインやグラフィックのコンピュータソフトウェアの株式会社 Too (1992年に社名変更)に成長したのは、英語の重要性を認識しビジネススクールで世界に人脈を広げる必要性を見通すふさこさんの深慮があったからに違いない。

ミルブルックリゾートが創設されたのは1992年だった。BWCの開場より8年前で、当初は採算がとれなかったが、今は東京ドーム50数個分の広さにゴルフコースと邸宅が建ち、世界中の著名人が購入して立派に経営している。石井さんがミルブルックの開発を決意した時、他の役員たちは「我々の会社のコアなビジネスとはかけ離れている。」と反対した。しかし、ふさこさんの支持で役員会は開発を決議した。「私は母の強い意志を尊敬している。」

と石井さんはTimes 記者に述べているが、記事の大見出しは「Millbrook founder credits his mother」である。

坂さんがBWCの株主会員権を会員権業者に頼らず、知り合いや同窓生のネットワークで売っていたころ、石井さんのミルブルックもまだ苦闘していた時期だ。多分、それだけに坂さんのチャレンジに石井さんは共鳴し、応援を惜しまなかったのだろう。石井氏は2019年に逝去された。亡くなる前は聖路加病院に入院されていた。中島のパートナーのヴァイオリニスト徳江尚子も入院しており、面会票を記入しているその時に夫人の石井博子さん（BWCの前理事長）と出くわし石井さんを見舞ったことがある。やつれていたがしっかりと目を見開いて「ああ、ケンちゃん。」と反応してくださった。新築されたばかりのホテルオークラでのお別れ会は、遺徳を偲ぶ方々が多く参列されていた。坂さんも中島も「ミュージアヘッド・フィールズは石井さん筆頭に多くの方々の応援で成長できた。」と首を垂れたのだった。